

銀座水族館 (七つの海の魚および水産切手)

—(20)—

東京支店 神原 勇

スズキ目スズメダイ科

クマノミ亜科

クマノミ *Amphiprion ephippium*

ハマクマノミ *Amphiprion frenatus*

カクレクマノミ *Amphiprion percula*

英名 anemone fish

熱帯魚関係かサンゴ礁の写真を見るとき、必ずといってよい程登場してくるのがこのクマノミで、だいたい色か赤色の体色に顕著なる1~3本の横縞があるので、他の熱帯魚との識別は容易である。

この横縞はクマノミは2本、ハマクマノミは1本、カクレクマノミは3本であるので種属間でも簡単に見分けられる。

太平洋・印度洋の熱帯海域のサンゴ礁のあるところに分布し、日本近海では沖縄・小笠原諸島・伊豆諸島に見られる。大西洋には分布していない。クマノミはイソギンチャクのあるところに生息しているが、イソギンチャクをはなれたクマノミを見る事はない。逆にイソギンチャクはクマノミなしでも立派に生息している。クマノミは大変鈍重であるのでイソギンチャクをはなれ過ぎると肉食魚のぎせいになってしまう。

クマノミとイソギンチャクの共生は従来の説では共利共生即共存共栄と解釈されてきたが最近の説によれば次のようである。

イソギンチャクの触手からは刺胞とよばれる毒針をもった細胞があるので、魚がこれに触れると一瞬のうちにしびれて動けなくなってしまう。クマノミは実験によれば皮のついていない肉片はイソギンチャクの触手が反応を示すが、皮のついた

肉片では全然反応を示さない。クマノミの皮膚より分泌する粘液がイソギンチャクの触手より身を守るのに役立っている訳である。

イソギンチャクの触手冠の上で捕食の際こぼれたものがイソギンチャクへの餌となっているわけではなく、また、クマノミが特別余分のものを餌として運び与えることでもなく、イソギンチャクの周辺をなわばりとすることにより他の肉食魚類からの攻撃に対しての防御に役立っているのも、積極的な共生への行動に出ているものと思われる。

なわばり意識が旺盛なため他のクマノミが自分のイソギンチャクのまわりに侵入すると防衛のための戦いが始まる。互いににらみあったまま金属的な“タック、タック、タック”という鳴声を発し威嚇動作をするが、これでも逃げ出さないときにはイソギンチャクの触手冠の上で戦闘が開始される。相手に尾ビレを向けて強くばたつかせ水流を吹きかけるやすばやく180度回頭して、さらに威嚇する。ついには相手の横腹にかみついたりする。クマノミは胸ビレが大きな扇形をしているので最大に開いて水流を受けとめたり、かみつかれたときには楯のような役目をする。

きわだった横縞とだいたい色の美しい体色のクマノミ類は比較的飼育し易く、市販の飼料でも可成り長生きさせることができるので、熱帯魚飼育家の間での人気者である。海中のスキndaイパーにとってはイソギンチャクの周辺から離れない習性のため、いつでも同じ場所で同じクマノミが見られるので親近感もあり、海中散歩を一段と楽しませてくれる存在でもある。

スズキ目 スズメダイ科 クマノミ亜科

クマノミ : *Amphiprion ephippium* : anemone fish
 ハマクマノミ : *Amphiprion frenatus* (crown fish)
 カクレクマノミ : *Amphiprion percula*

インド洋 太平洋、熱帯海域、サンゴ礁に広く分布し、1~3本の縦縞の白い横縞を有し、他魚との識別は容易である。クマノミ類とイソギンチャクの間は従来共利共生と思われてきたが、現在では相互に利便を享受する関係が示されている。海産熱帯魚の中でも比較的飼育しやすい。



カクレクマノミ
 マリス・フツナ諸島 -1963



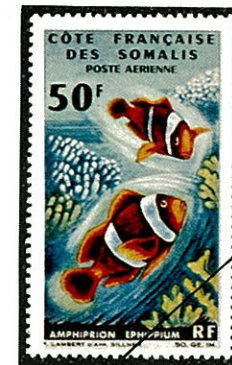
カクレクマノミ
 オーストラリア -1966



カクレクマノミ
 シンガポール -1962



カクレクマノミ
 英領ソロモン諸島 -1972



クマノミ
 仏領ソマリランド -1966



ハマクマノミ
 沖縄 -1966